

ESSAY いたずら

倉元 信行

20

バカヤロー

誰でも恥ずかしい思いをしたことの一つや二つはあるものだろう。ずっと間違いをしていて、後で気がつき、なんと恥ずかしい事とも思っても、もう取り返しがつかない。

私はとんでもない漢字の間違いを長年続けていた。頑張るといふ漢字を“顔張る”と書いていたのである。

気がついたのは会社に入らずいぶん経ってからである。恩師の先生方には、会社に入って“顔張っています”というような年賀状をよく書いていたのだから、赤面ものである。こういうのは証拠まで残るからよけいに始末が悪い。

文字どうり、自分の“顔を張り”たいくらいである。

ある人が本の中で、自分は頑張るといふ言葉が好きではないと、書いているのを読んだことがある。具体性の無い無責任な言葉だからといったようなことが書かれていたと思う。

そういえば確かにそうで、よく転勤で出て行く人なんか、頑張って下さいと、何気なく言うが、考えれば何も言っていないのと同じようなものである。

だからこういう場合には、家族の事とか住まいの事など、何か具体的なことをなるべく言うようにしている。そのあとに、頑張ってと、付け加えることはあるが、こういう訳で、今は正しく“顔張る”と書けるのだが、年賀状でこの言葉を使うのは止めた。

恥ずかしい、を乗り越えて真っ青になったことがある。これは何年か経って、アツと気づいたのであるが。

何度目かのアメリカ出張で、RCA研究所といとところを訪れた時のことである。技術的な説明を終えて何か質問はと、言っても誰も何も言ってくれない。

こんな事は初めてであった。大体ディスカッションの方が長くなるのが普通である。結局、そのまま何にもなしで帰

ることになった。

私は、この事が不思議でずっと頭の底にこびりついてた。

何年後だったろうか、この理由に突然思い当たった時、思わず自分にバカヤローと叫んだ。

あの時、出席していた先方の技術者は白人3人と黒人1人の4名だった。この4人に私は次のような説明をしたのである。

「従来の窒化アルミというセラミックスは、不純物を多く含むため黒い色をして、物性も良くありませんでした」

「我々が開発したものは、純度を格段に上げることができたので、白い半透明しており、その結果熱を伝える性質を飛躍的に向上させることができました」

科学的に何にも間違っていない、きちんとした説明である。

しかしここで私は“ブラック”をきたなくて劣るといい、“ホワイト”がきれいで性能が良いと言っているのである。黒人のいるところでこれはまずい。

学会の発表なら何の問題もないだろうが、小人数で小さなテーブルを囲んだこの場では明らかに

不適切な表現であろう。

ぶん殴られなかっただけマシだったのだ。

無知は恐い。本人が恥ずかしいことだと、気がついていないからなおさら恐い。

もう一つ、気づいた瞬間青くなったことがある。

すでに結婚していたが、披露宴での司会役はなお続いていた。この時は大学の後輩のM君に頼まれて新幹線で博多に向かっていった。

車内で念のため、この2時間の式の前稿にもう一度目を通した。これでよしと確認したまでは良かったが、その原稿を車内に置いたまま降りてしまったのである。

気がついた時、すでに新幹線は遠くの車庫の中に消えていた。

私の、物の置き忘れには、母はいつもあきれていた。あなたには雨が降っても傘を持たしとしないと、しょっちゅう言われていた。またやってしまった。

とにかく式場に駆けつけた。頭の中は真っ白だった。時間には少しゆとりを持って来ていたので開始まで一時間半残っている。

私はご両親などへの挨拶もそこそこに紙と鉛筆を借りて、静かな部屋を貸してもらった。ここで一人原稿を思い出しながら再生作業を始めたのである。

びっくりした。最初の入場から仲人、来賓、友人、親族、そして最後の父親の挨拶まで、氏名や二人との関係など、順序通りにすべて完全に再生できたのである。

自分の記憶力がそれほど良い方であるとは思っていなかったのも、この時は正直 妙に感心した。

「司会の原稿を新幹線に置き忘れて大変だったよ」

「エー、全く気がつきませんでしたよ」とM君。

それはそうだ、原稿は完全に再生されていたのだから。

でもこんな冷や汗は二度とごめん

